

女性向けのことば遣いのマナー本にみる
言語規範とその変化

増 田 祥 子

Journal of Language and Culture
Language and Information
Vol. 6 (2011)
Department of Language and Culture
School of Humanities and Social Sciences
Osaka Prefecture University

言語文化学研究（言語情報編）
2011・3 第6号抜刷
大阪府立大学人間社会学部 言語文化学科

女性向けのことば遣いのマナー本にみる 言語規範とその変化

増 田 祥 子

1 はじめに

本研究では、話し方やことばの使い方のマナーについて書かれた本を資料とし、女性向けに書かれたマナー本で示される言語規範について考察を行う。

マナー本は言語使用において存在する「こう言うべき・言うべきでない」という規範を示し、遵守することを促す媒体である。そのマナー本において、出版年代によって女性に対する規範がどのように変化するのか、また変化しないのかについて調査した。

女性に対するマナー本では、年代を問わず女性のことばの美しさを要求し、そのために適切なことばを使用すべきという規範が示されている。その一方で、マナー本の出版年代が新しくなるにつれ、敬語使用、文末詞、会話での行動において、男女差があるべきであるという規範が示されなくなる傾向が見られた。本論文では、これらの男女差の縮小は、マナー本での「美しいことば」の捉え方の変化であると主張する。

2 ことば遣いに関するマナー本

本論文では、一般向けに出版された本で、ことば遣いや話し方について、言語形式やそれに関連する要素¹を取り上げ「こうすべき」「こ

¹杉戸(1983)で提唱された「言語行動の主体・相手・機能上の種類・ジャンル・言語形式(表現)・素材(話題)・言語表現の調子・物理的側面・心理的場面・接触状況(媒体)・目的と動機・結果(効果)」の12項目。

うすべきでない」といった言語行動規範を示す書物をマナー本と呼ぶ。話し方やことば遣いについて書かれたマナー本は、毎年数多く出版されており、年間ベストセラーランキング²にこれらの本が入ることもある。また、50年以上マナー本は出版され続けており³、様々な著者が様々なマナー本を出版している。

マナー本は、「読者の知りたい規範」をマナー本の著者が教える形で提示している。それは、「 ならばこうすべきである」という著者の目を通した、社会の規範の反映であると言える。そして、その規範は時代によって異なると考えられる。

本研究では、このような特徴をもつマナー本で女性に対して語られる規範が、時代によってどのように変化しているのかを論じる。

3 先行研究

女性の言語規範を取り上げた研究には中村(2007)、女性向けのことば遣いに関する実用書を取り上げた研究には岡本(2010)がある。

中村(2007)は、室町期から江戸期、明治期に渡って女性のことばに対する言説の分析から、「女ことば」がいかにして作り上げられてきたかを論じている。また、戦後の1960年代半ばまでの「女ことば」の記述についても取り上げている。中村(2007)は「女ことば」を分析するにあたり、女性向けのマナー本のみを調査対象としておらず、また、1970年代以降のことば遣いの本に関しては論じていない。

岡本(2010)はことば遣いの実用書の分析を行っているが、女性向けの実用書をひとまとめにして扱っており、時代による違いなどは論じられていない。本研究では出版年代によって女性向けマナー本がどのように異なっているかに着目して研究を進めていきたい。

²出版科学研究所が毎年刊行している『出版指標年報』による。

³国立国会図書館の蔵書検索(<http://www.ndl.go.jp/index.htm>)や『国語年鑑』を参照。

4 調査資料

1950年から2009年に出版されたマナー本のうち、女性に向けて書かれた本を調査対象とした。女性向けであるかどうかは、本のタイトルや前書きなどで女性に対してであると明示されている場合、もしくは本文の記述が女性に対して示されているか否かによって判断した。

本研究では、資料の出版年代と本に書かれる内容を関連づけ、考察することを目的とするため、以下のような制限を設けた。

- ・再版・改題された資料は調査対象外とし、同名の書籍の最も古い資料を対象とする。
- ・同一著者の本は1冊までとし、原則として最も古くに出版された資料を対象とする。

これらは、特定の著者による内容の偏りを避けるためと、内容を変更しないまま再出版された資料を避けることで、内容と出版年代のずれをできる限りなくすためである。

また、マナー本は様々な場面を扱ったものが出版されているが、本論文では、1対1で会話を行う場面を中心に扱った書籍を選び調査を行った。以下に出版年代ごとの調査資料数と得られた事例数⁴を示す。

表1 年代ごとの冊数・事例数

出版年代	冊数	事例数
1950・1960年代	3 ⁵	279
1970年代	7	673
1980年代	7	500
1990年代	7	433
2000年代	7	751

⁴事例の数え方は、1つの場面に1つ以上の言語項目があれば1例とし、場面や状況が変わることで言語項目に変化があれば異なる例として数えた。

⁵上述の制限によって、1950年代と1960年代に女性向けに出版された資料は3点のみとなった。

5 女のことば遣いへの変わらぬ要求

5.1 美しいことば遣いの規範

女ことば規範とは、女性のことば遣いに対する「こうすべき」「こうすべきでない」という行動規制である。

女性向けのマナー本では「適切なことばを使うべきである」という規範が示される。また、適切なことばは、「美しさ」とも絡めて論じられる。

(1)では、ことばの美しさは使用者の人格の魅力や美しさと結び付けられている⁶。ことばの美しさを身につけることで、使用者は人格的な美しさや魅力を手に入れることができ、美しくなれることを示す。

- (1) 顔や姿の美しさは人の目をひきますが、心まではひきつけません。言葉づかいを身につけて、はじめてあなたは魅力ある女性になれるのです⁷。(主婦と生活編(1952)『実用本位 上手な話し方の事典』p.106)

この、女性が美しいことばを使うべきであるという規範と、ことばの美しさと人格・見た目の美しさとの関連づけは、1990年代の例である(2)、2000年代の(3)にも変わることなく示されている。

- (2) 言葉の美しさや気づかいは、その人のすべての美しさにつながります。不思議なもので、きれいな言葉づかいができる人は、笑顔や顔立ちまでも美しく見えてくるものです。反対に言葉が美しくないと、印象や顔立ちまでもが醜く見えてしまうものです。(田丸美寿々(1996)『言葉のおしゃれ 365日』p.6)

⁶同様の指摘は岡本(2010)にもある。

⁷以下、例の下線はすべて筆者による。

- (3) 品のよい話し方やことは遣いは、美しいふるまいや、品性の保たれた身だしなみとともに、「素敵な人」となるための大切な要素です。(小笠原敬承斎(2006)『聡明な女性は会話上手 - あなたの魅力を伝える話し方とマナー - 』p.5)

5.2 強固な語彙選択の規範

女性が美しいことはを話すために、女性が守るべき規範として示されるのが、「適切な語彙を選択すべきである」という規範である。使用すべきでない語彙として取り上げられるのは、流行語や隠語、俗語、若者ことはや外来語と呼ばれる語種・語彙である。

- (4) 流行語：若い女の人が友達同士で話しているのを聞くとともになしに耳にすると、相当使っているし、得意になって用いている人もあるようですが、そんな流行をおうことはおしゃれでも、身だしなみでもありません。正しい言葉が、あなたを床しく見せます。(主婦と生活編(1952)『実用本位上手な話し方の事典』p.212)
- (5) 日常の会話のなかでときおり使われるのに、俗語、隠語というものがあり、低俗で品の悪いことはです。「わたしがちよっと失敗したら、係長ったら、ボロクソにいうんですの...もう、ヤケノヤンパチだわ...アツマにきちやう」こんな言い方をしたら、失敗したあなたに誰も同情しないかもしれませぬ。俗語を使うと話し手の人柄、品位までも下げてしまうからです。(小滝光郎(1983)『ことはづかいの研究 女性を生かす言い方・話し方』p.170)

(4)では、流行語を使用すべきでないことが、(5)では「ボロクソ」「ヤケノヤンパチ」のような俗語を女性が使用すべきでないことが示

されている。流行語や俗語、隠語や下品なことばの使用を避けるべき理由として、これらの語を使用することで話し手である女性の品位を落としてしまうからである、と述べる。特定の語彙の使用は話し手への評価と結びつけられるのである。このように話し手自身への評価のために語彙・語種を選択すべきであるという規範は、出版年代を問わず存在している。

(6) どう考えても、「超 _____」と言うよりは、「非常に _____」と言ったほうが、知的で大人の女性に見られますよね？(中略)きれいな言葉遣いで、エレガントな女性を目指しましょう。う。(市川浩子(2009)『働く女(ひと)の伝わる話し方の新ルール』p.32)

語彙選択の規範は、今回調査した女性向けマナー本 31 冊のうち、25 冊に見られ、かつ 1950 年代から 2000 年代のどの出版年代にも存在した。適切な語彙を選択することは女性のことば遣いにとっていつの時代においても重要視される、強固な規範であるといえる。

流行語や若者ことばや隠語は、特定の仲間内で使用される集団語の性格も帯びており、使用する相手によっては意味が通じないという情報伝達上の問題も生じる。しかし、女性向けマナー本で示される語彙選択の規範 227 例のうち、情報の伝達を問題とするのは 34 例で、それ以外の 193 例は語の使用者への評価を問題としていた。

女性は使用する語彙によって話し手が評価を受けること、そのために語彙を適切に選択すべきである、と見なされていることがわかる。

6 女ことば規範の変化

6.1 男女のことばの違い

ここでは、ことば遣いの男女差についてどのように捉えられているかを見る。マナー本では女性は「女ことば」を使用し、男性と同じ言語使用をすべきでないという規範が述べられる。

- (7) 男女同権といっても女はやはり女性らしいしとやかな言葉を使うことが好ましいのですから、男性的、あるいは中性的な粗暴にひびく言葉はつつしみ、相手次第によって、いつでもスラスラと敬語を操ることができるように、一通りの常識を備えておくことが現代女性のたしなみの一つでしょう。(主婦と生活編(1952)『実用本位上手な話し方の事典』p.205)
- (8) 女の人が男と同じ言葉づかいをしている場合が最近よくありますが、これは避けるべきです。やはり女性には女性らしい話し方というものがありますから、(中略)男の人に合わせることはありません。(主婦の友編(1972)『愛される話し方・聞き方』p.206)

(7),(8)では女性は男性と同じことばを話すのではなく、女性は女性のことばを話すべきであると述べられている。

また、女ことばは美しいものであり、美しいことばを話すためにも女ことばを使用すべきであるとも述べられる。

- (9) 女性にはやさしさがなければいけないのです。ですから、女性が女性である限り、最も美しい日本語といわれる女性ことばをつかうべきです。(小滝光郎(1983)『ことばづかいの研究 女性を生かす言い方・話し方』p.154)

女性に女ことばの使用を働きかけるだけでなく、女性が女ことばを使用せずに男性と同じことばを使用することに対して批判も行われている。このような批判の裏には、女性は女ことばを使用すべきであるという規範と、それから逸脱したことば遣いをすべきでないという意識の両方が存在すると考えられる。マナー本では、そのためにどのよ

うな言語行動をとればよいかを示しているが、男女の違いに言及する項目は、年代が新しくなるにつれ、男女差が縮小していく傾向が見られる。以下では、男女差について言及する項目を取り上げ、どのような規範が存在し、またその規範が出版年代によってどのように変化しているかについて論じる。

6.2 文末詞の使用規範の変化

「女ことば」の特徴として挙げられるものに、文末詞があり、益岡・田窪(1992)や井出編(1997)など、多くの研究で、女性の使用する文末詞と男性の使用する文末詞が異なることが指摘されている。ここではマナー本の中の女性の発話における文末詞の使用について考察する。

6.2.1 文末詞に関する記述

女性の使用する文末詞に関して、マナー本では(10)のように「女性が使用している」という記述が見られる。

- (10) 「そのようよ」「いやだわ」の「よ」や「わ」の表現、(中略)「...のよ」「...ねえ」「あら」「まあ」「...よ」なども、よくつかわれている女性語でしょう。(小滝光郎(1983)『ことばづかいの研究 女性を生かす言い方・話し方』p.154)

一方、男性が使用するとされる文末詞を女性が使用することに対しては、批判が行われる。(11)は、男性が使用する「だよ」という形式を女性が使っていることに対しての非難である。

- (11) 「女らしさは、忘れちゃだめなんだよ」と主張する女性がいきました。ですが、「だよ」という男言葉が気になって、「本当にそう思ってるの」と疑ってしまいました。(杉本泰夫(1993)『知的な女性は話し上手 あなたが変わる10の秘訣』p.119)

女性文末詞の使用に関しては「女性が使用すべき」と積極的な働きかけはないものの、女性が女性文末詞を使用することは当然視されている。そして、女性の男性的表現の使用は批判の対象であり、女性が使用すべきではないと考えられていることがわかる。

6.2.2 女性文末詞の使用・不使用

マナー本には、女性の言うべき表現を例を挙げて示す部分がある。このようなマナー本で適切とされる表現において女性文末詞が使用されるかどうかについて調査した。

尾崎(1997)は女性文末詞の特徴として、終助詞「わ」の付加(行くよ 行くわよ)と、助動詞「だ」の省略(雨だよ 雨よ)の2つを挙げている。本論文でもこの2つの特徴に焦点をあてる。

終助詞「わ」の付加

ここでは、女性の会話例において終助詞「わ」が用いられているか否かについて論じる。尾崎(1997)が述べているように、「わ」を付与することは女性的表現となる。「とても嬉しい」という表現は「とても嬉しいわ」と「わ」を付けて言うことも可能であるし、付けずに言うこともできる。このように「わ」が文法上、使用可能状況において、「わ」が使用されるか否かを調査した。

表2 「わ」の使用・不使用対立表

	「わ」使用形 女性文末詞	「わ」不使用形 男性文末詞
動詞+わ(ね・よ・よね)	食べるわ(ね・よ・よね)	食べる(ね・よ・よね)
形容詞+わ(ね・よ・よね)	嬉しいわ(ね・よ・よね)	嬉しい(ね・よ・よね)
形容動詞(語幹)+だ+わ (ね・よ・よね)	嫌いだわ(ね・よ・よね)	嫌いだ(ね・よ・よね)
名詞+だ+わ(ね・よ・よね)	雪だわ(ね・よ・よね)	雪だ(ね・よ・よね)

調査した形式は、水本ら（2006）を参照し、「- わよ（ね）」と「- よ（ね）」、「- わね」と「- ね」、「- わ」と「- （わのない形式）」である。マナー本から抜き出した会話部分において、上記の表2を手掛かりに「わ」が付与される文と、「わ」を付与することは可能であるが、実際には不使用である文を数えた。「わ」を入れることが可能かどうかの判断は、筆者と筆者以外の4名に実際には「わ」が用いられていない文を示し、「わ」を入れても不自然でないかどうかで判定した。判断では、5名のうち1名でも不自然とした例は除外した。

「わ」が使用可能な文は142例であった⁸。この142例において、使用・不使用のどちらが選択されているかを年代ごとに算出したのが図1である。

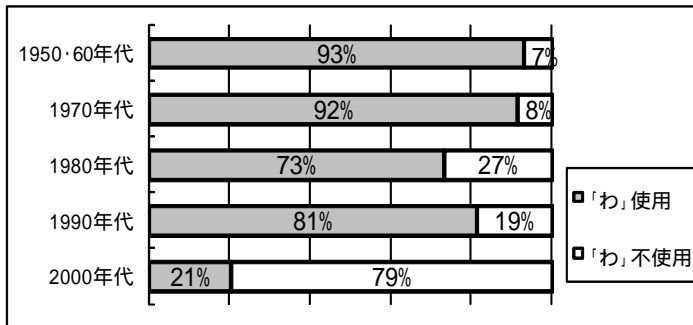


図1 年代別 終助詞「わ」の使用・不使用

「わ」の不使用は、1980年代で3割近くなり、1990年代にはいったん減少するものの、2000年代では「わ」を使用しない割合が8割近くにまで達している。

⁸調査では、普通体の発話例を対象とした。これは、女性文末詞を扱った先行研究では、親しい友人との会話場面など、カジュアルな場面での使用分析が行われているという点と、出版年代が古いマナー本にのみ「ですわ」のような丁寧体に「わ」が接続する例が見られ、年代別に使用・不使用の対立を考察する際に大きく傾向が変わる可能性を避けるためである。

助動詞「だ」の省略

ここでは、助動詞「だ」が女性の会話例において省略されるか否かについて取り上げる。助動詞「だ」が省略されると女性的表現となり、「だ」が省略されないと男性的表現となる。調査した形式は「-の」と「-のだ」、「-のよ」と「-のだよ」、「-のね」と「-のだね」、「名詞・形容動詞の語幹+ね」と「名詞・形容動詞の語幹+だね」、「名詞・形容動詞の語幹+よ」と「名詞・形容動詞の語幹+だよ」である。これらの形式のうち、「だ」を使用するか否かを調査した。調査対象文数は、206例である。

表3 「だ」の使用・不使用対立表

	「だ」省略 女性文末詞	「だ」使用 男性文末詞
名詞+だ+ね 形容動詞(語幹)+だ+ね 非活用語+だ+ね	雪ね すてきね 東京からね	雪だね すてきだね 東京からだね
名詞+だ+よ 形容動詞(語幹)+だ+よ 非活用語+だ+よ	雨だよ きれいよ 東京からよ	雨だよ きれいだよ 東京からだよ
動詞/形容詞/形容動詞/名詞(+な) +のだ(+よ/ね)	行くの 嬉しいのね いやなのよ	行くんだ 嬉しいんだね いやなんだよ

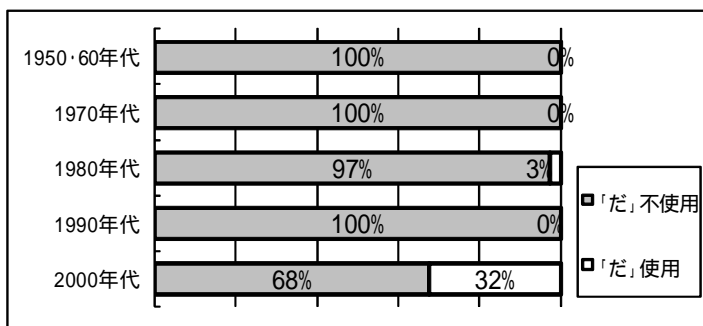


図2 年代別 助動詞「だ」の省略

「だ」の省略されない形式は1990年代まではほとんど使用されないが、2000年代では「だ」が省略される場合と「だ」の省略されない場合の両方が存在している。

「わ」の付加、「だ」の省略のどちらにおいても、特に2000年代で、従来の女性文末詞ではない形式の使用が増える傾向が見られた。

マナー本の中での女性の発話は、女性文末詞が使用されるのが当然であるという傾向から、女性の発話であっても必ずしも女性文末詞を使用するわけではないという傾向へと変化している。使用すべきでないと言われていた男性文末詞に関しても、使用する例が見られ、使用することへの許容へと規範が変化していると考えられる。

6.3 敬語使用における男女差の縮小

女性の言語使用において、敬語は重要な項目であり⁹、「美しいことばのための重要な要素である」とされている。また、調査した資料31冊のうち敬語の記述のない資料は、2000年代の資料2冊のみで、それ以外の資料は敬語を取り上げている。

(12) 正しい敬語は、美しいことば、魅力的なことばのための第一の要素でもある。(巻正平(1978)『愛される女らしい言葉』p.43)

(13) 美しく、大人っぽい言い回し：尊敬語：上司や目上の人などを敬い、動作や状態について話すときに使います。(杉山美奈子(2005)『話し方のマナーとコツ』p.120)

6.3.1 1950年代～1980年代の規範

1950年代から1980年代のマナー本では、男女が異なる敬語形式を使用すること、また、女性は男性よりも丁寧な形式を使うべきという

⁹ 岡本(2010)でも、女性向け実用書における敬語の取り扱いの多さを指摘している。

規範が見られた。

- (14) お...になる、...していらっしゃるなどの形が女の人の会話の敬語としてふさわしい感じです。(平井昌夫・中村裕子(1955)『若い女性の知性と情操を高めるスマートな話し方』p.80)
- (15) 「れる、られる」の敬語も、そんなことから、男の人によく使われます。(中略)女性の場合は、「れる、られる」でないほうが無難でしょう。(後藤美代子(1983)『女性のための話し方のエチケット』p.78)
- (16) 女性は「...ございます」体を使う方が丁寧だと言う人もいます。「それをうかがって、わたくしとてもうれしゅうございます」(永崎一則(1981)『魅力的な女性は話し上手』p.252)

これらの3つの例では、女性は「れる・られる」といった丁寧度の低い形式ではなく、「お～になる」「していらっしゃる」などの丁寧度の高い形式や「ございます」を使用するほうがよいことが示されている。特に(15)は、男性の使用と対比し、女性は「れる・られる」を用いないほうがよいことを示している。

また、職場の上司を「役職+さん」と呼ぶか「役職」のみで呼ぶかについても、女性は「役職+さん」で呼ぶほうがよいという規範が存在している。これらの記述より、男性と女性は異なった敬語形式を使用すべきであること、さらに女性は男性よりも丁寧な形式を用いるべきであると考えられていることがわかる。

- (17) 「課長」という呼びかけと「課長さん」という呼びかけの両方が使われていれば、あなたは「課長さん」のほうを使う

方がいい。 (巻正平(1978) 『愛される女らしい言葉』 p.60)

また、敬語の運用に関して、女性は男性に対して敬語を使用すべきという規範も見られた。

- (18) 親しめる敬語を使ってソフトに：また、男の人と口をきく場合には、相手に対して軽い敬語を使いましょう。 (主婦の友編(1972) 『愛される話し方・聞き方』 p.207)

6.3.2 1990年代以降の規範

1990年以降のマナー本では、女性と男性が異なる敬語形式を使うべきという規範は見られず、女性は使用しないほうがよいと言われていた「れる・られる」敬語についても、使用を制限する規範は見られない。また、男性に対して女性が敬語を用いるべきであるという規範も見られない。

- (19) 敬語 尊敬語 「れる・られる」、「お(ご)～になる」をつける場合：書かれる・お書きになる・乗られる・お乗りになる (小笠原敬承斎(2006) 『聡明な女性は会話上手』 p.87)
- (20) 「部長」「課長」といった役職名は、すでに敬称ですから、基本的には「さん」づけはしません。 (田丸美寿々(1995) 『言葉のおしゃれ 365日』 p.264)

(15)と(19)は「れる・られる」を、(17)と(20)は敬称について取り上げており、それぞれ同じ敬語形式に対する記述である。しかし、使用しないほうがよいとされていた丁寧度の低い形式は、1990年代以降のマナー本では丁寧度の高い形式と同様に示され、男女の使用の差異にも言及されていない。

1990年代以降のマナー本でも、敬語に関する規範は示されているが、

丁寧度の高い形式と低い形式を同列に扱うようになり、「女性はより丁寧な敬語使用をすべきである」という規範が見られなくなっている。

6.4 会話における役割の多様化

マナー本では、話し方だけでなく聞き方についての規範も示される。ここではこのような会話での役割やとるべき言語行動についての規範の変化を取り上げる。

6.4.1 1950年～1980年代の規範

マナー本では、女性に対して相手の話に対してうなづくことや、相づちを打つことなど、聞き手としての規範を多く示している。(21)では、女性が聞き手であることが重要であると述べ、女性＝聞き手の位置という会話での役割を表している。

(21) 要は女性にとって聞き上手であることはぜひとも必要なことです。男性でも同じですが、特に女性は、母となり妻となるということを考えても聞き上手であってほしいものです。何よりも包容力のある、思いやりのある女性、それはまず聞き上手であることに始まるといっても過言ではありません。(下重暁子(1974)『聞き上手 話し上手 - 人に好かれる秘訣 - 』p.73)

(22) 話の要点でうなずいてあげる：聞くときの秘訣は唯一つ、相手の話の要点でうなずいてあげることです。聞き手が要所所所でうなずけば、それに力を得て、相手は一生懸命しゃべるものです。(主婦の友編(1972)『愛される話し方・聞き方』p.197)

(22)でも、女性は聞き手としてうなづく役であり、相手が話すの

を手助けする役として位置づけられている。また、(23)のように女性の話しぶりに対する批判も見られる。(23)では女性は話に無駄が多いことを述べ、女性が話すことに対し、良い評価を示していない。

- (23) ところが、一般に女性の話には無駄が多いようです。女性が話し好き、おしゃべりと言われるのはどうしてでしょう。
(小滝光郎(1983)『ことばづかいの研究 女性を生かす言い方・話し方』p.119)

6.4.2 1990年代以降の規範

1990年代以降では、聞き手としての規範も見られるが、一方で女性が積極的に会話を進行するための規範も示される。

- (24) 1手先も読まずに発言をしてしまうと、そこで会話が止まってしまいます。たとえば、「マドラスチェックって去年大流行したけど、今年着ても新鮮ね」なんて言ってしまうと、相手の答えは「ええ」で終わり。でも、3手先まで読んでいれば、相手の答えが「はい」「いいえ」で終わってしまうような一方的な発言はなくなるんじゃないでしょうか。(小俣雅子(1995)『言葉ひとつで女があがる』p.23)

- (25) 「幹事さん、かなり飛ばしてますね」でいったん言葉を切り、相手の反応を待つ。そのうえで、話しやすそうな話題を少しずつ出してみても、感触を確かめていると、相手に乗ってくる話題がみつかるかもしれません。(渡辺由佳(2006)『28歳になったら読みたい カッコいい大人の女になる! 話し方レッスン』p.154)

(24),(25)では相手が話すのを受動的に待ち、女性が聞き手としてうなずくことで手助けするのではなく、相手の話をうまく引き出し、

自らの進めたい方向へ会話を進めるためにどうすべきかについて書かれている。女性は聞き手という役割を割り当てられ、その役目をこなすことが重要視されていたのが、マナー本の出版年代が新しくなるにつれ、女性の会話での役割が「よい聞き手であること」だけでなく、会話の進行や管理にまで広がり、そのための規範が示されるようになるのである。

7 まとめと考察

本稿で論じたマナー本における規範の変化しない部分と変化した部分をまとめると表4のようになる。

女性向けマナー本で語られる規範とは、女性に対して美しいことば遣いを要求するものである。それはマナー本の時代を問わず存在している。女性は美しいことばである女性特有のことばを使用すべきであり、男性と同じことばの使用は批判の対象であった。しかし、ことば遣いに男女差があるべきという規範は、マナー本の出版年代が新しくなるにつれ縮小傾向にあることが明らかになった。かつて女性にとって規制の対象であった言語行動が、許容されるようになりつつあると言える。このことは、女性の可能な言語行動が増えることになり、女性の行動の多様化へと繋がると考えられる。

本研究で論じた規範の男女差の縮小は、女性の使うべき「美しいことば」の指す内容が変化していることの現れと考えられる。

規範の男女差が縮小する傾向は、2000年代に顕著に見られたが、マナー本の中でも「女性は女ことばを使用すべきである」という主張自体が、2000年代の資料で見られなかった。

表4 規範の変化のまとめ

	規範の種類	規範の内容	
規範 変化 しない	女性のこ とば遣いへの 要求	美しいことばを使用すべきである。 美しいことば = 美しい女性	
	語の選択	語彙を適切に選び、使用するべきである。 語の選択・使用 = 女性自身への評価	
変化 した 規範	文末詞	女性文末詞のみを使用。	《2000年代から》 女性文末詞の不使用、男性文 末詞の使用など、女性の使用 形式の多様化へ。
	敬語使用	女性は男性より丁寧な 形式を使用すべきであ る。 男性に対して敬語を使 うべきある。	《1990年代から》 女性がかつて使用すべきで ないとされた、丁寧度の低い形 式も使用してもよい。 男性に対して敬語を使用すべ きという規範を示さない。
	会話の役割	よい聞き手となり、相づ ち、うなずきで相手の話 を手助けするべきであ る。	《1990年代から》 聞き手のみならず、女性が会 話を管理し、進行するための 規範を示す。

女性のこことばが男性と異なること、つまり女こことばを使うことが「美しいことば」に必要な要素であったが、出版年代が新しくなるにつれ、男女差が必ずしも「美しいことば」にとって必要な要素とは限らなくなってきたのではないだろうか。

一方で、美しいことばをマナー本が要求することは変わらない。男女差を重要視しなくなりつつある2000年代のマナー本で、美しいことばを維持するために何を要求するのか、という点からも今後考察を行いたい。

このような変化が起きていることを決定づけるためには、今後はさらにデータを増やすことと、男性向けのマナー本に示される規範との違いにも注目しながら、女性に対する規範の変化について更なる考察を行う必要がある。また、マナー本での規範の変化が現実の社会とど

のような関係があるのかについてもさらに考察を深めていきたい。

参考文献

- 井出祥子編(1997)『女性語の世界』 明治書院
- 遠藤織枝(1997)『女ことばの文化史』 学陽書房
- 遠藤織枝・尾崎喜光(1998)「女性のことばの変遷 - 文末・コト・テヨ・ダワを中心に - 」『日本語学』, 17(5), 56-79
- 岡本成子(2010)「『言葉美人になる法』: 女性の話し方を教える実用書の分析」『日本語とジェンダー』10
(http://www.soc.nii.ac.jp/gender/journal/no10/01_okamoto.html)
- 小川小百合(1997)「現代の若者会話における文末表現の男女差」日本語教育論文集 小出詞子先生退職記念編集委員会(編)『日本語教育論文集 - 小出詞子先生退職記念 - 』凡人社, 205-220
- 尾崎喜光(1997)「女性専用の文末形式のいま」現代日本語研究会(編)『女性の言葉・職場編』 ひつじ書房, 33-58
- 佐竹久仁子(2005)「女ことば/男ことば 規範をめぐる戦後の新聞の言説 - 国研「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」から - 」『阪大日本語研究』17, 111-137
- 杉戸清樹(1983)「待遇表現としての言語行動 - 「注釈」という視点」『日本語学』2(7), 25-42
- 中村桃子(2007)『「女ことば」はつくられる』 ひつじ書房
- 西尾純二(2005)「上品なことば・下品なことば」上野智子・佐藤和之・定延利之・野田春美(編)『日本語のバラエティ』おうふう, 78-83
- 日本語記述文法研究会(編)『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法 - 改訂版 - 』くろしお出版
- 水本光美・福盛加寿子・福田あゆみ・高田恭子(2006)「テレビドラマに見る「女性文末詞」 - 実際の会話と比較して - 」『国際論集』5, 51-70
- (大阪府立大学大学院人間社会学研究科 博士後期課程)